死に場所を探す中で、足立智成は不思議なものを見た。視線の先には花を売る少女がいた。
彼は、季節が春や夏であれば立ち止まりはしなかっただろう。しかし、今の季節は冬であり、旅行に来ているそこでは雪がこんこんと降っていた。豪雪地帯というほどではないが、海に面し、山の裾野に広がるその町はよく冷え、空気がよく溜まった。
そんな中で、あまり充分に見えない服装の同年代ほどの少女が立っているのを見れば、その様を不思議に思うのはあまりにも当然だった。周囲を行き交う人の姿はちらほらとあったが、ちらちらと見るばかりで立ち止まりもしない。足立はその状況にいらだちを覚えることなどはなかった。彼は自分で考え、近場のコンビニでおしるこを二つ買い、今度は少女に声をかけた。
「あの」
「はい、なんでしょうか」
雪景色に似合わない明るい声だった。
「これ、もしよければ」
見知らぬ男に差し出されたそれを見て、男の顔を見て、少女は純な笑みを浮かべた。
「ありがとう！」
「……なんでこの季節に花なんか売ってるの？」
少女は問いかけを気にせずにおしるこを飲んだ。ごくごくと飲み干してしまってから、彼女はやっと答えた。
「どんな日でも、花を求めてる人がいるかもしれないでしょ？」
それは足立が想像していた中のいづれの答えでもなかった。
「……そっか」
しかし、みょうにすとんと納得できた。
足立も缶に口をつけながら、足元の銀色のバケツに収められた花を見る。
ちいさな花びらの中で青が鮮やかなグラデーションを帯びている。
「綺麗だ。たしかに冬に似合う花だ」
この花を抱いて死にたい、という強烈な想いは当然秘めた。しかして強く望んだ。
「おいくら？」
「あなたには売れないわ」
「え？？？」
「次、来た時に売るわ。ちゃんととっておくから」
足立は二度ほど口をぱくぱくと動かしたが、結局、ぐっと固く閉じてから、理解を口にした。
「わかった。また来る」
少女は嬉しそうに笑った。
足立は礼を言ってその場を離れた。やがて曲がり角で振り向いたが、そこには誰もいなかった。かつて自殺を望んでいた男は、短く息を吐き、前を向いて歩き始めた。